

觀相の秋

北原白秋

青空文庫

序

虚と実とは裏と表である。實にして虚、虚にして実なるが故に尊い。何れは先づ実相のまことを觀、觀て、深く到り得て、更に高く離れむ事をわたくしは願つてゐる。

実相に新旧のけぢめは無い。常に正しく新らしいからである。これを旧しとなすは觀て馴れ過ぎたからである。一時の流行は時とともに滅びる。而も人はただ新奇を奔り求める事に於てのみ、その詩境を進め得るものと思つてゐる。然し何ぞ知らむ。此の東に於てひたすら彼の西の旧を趁うて新らしと成す秋に、却て西に

於ては此の東方に道を求める事が常に新風發生の素因を成してゐる。かうなると何が新らしいかと思はせられる。

再び云ふ。実相のまことこそ常に正しく新らしいものである。いつ觀てもまことなる事に於て渝りは無い。芭蕉の説いた不易はこの永生の流に通ずるまことの詩の精神である。詩の正風はさうした精神に根柢を置く。この精神は殊に我が東洋芸術の真髓と成すところのものである。

此の集の詩もおそらくは今人の眼に旧しとせられるであらう。それでわたくしはいいのである。詩境の高さは觀相そのものの高さに由る。氣品は巧みて得らるるもので無い。その人のおのづかなる円光である。だからわたくしは所謂新奇に浮かれて飽かざ

る事よりも詩のまことの大道をただ一筋に修めて行けばいいのである。

此の集には詩文（私は散文詩なる翻譯語を好まない。）と長歌体の詩篇とを収めた。詩文には口語脈と雅文脈との二種がある。何れも純粹の意味に於ける詩として書き下ろしたので無い。私にとつてはこれらは矢張り詩文であると遜る方がほんたうである。一方にまた長歌体を選んだのはさう成る可き内容だったからである。長歌は万葉に由来するが、わたくしのものは万葉のそれとも違ふ。わたくしの詩の内容にその形式を採つたのである。此の形式のすぐれたところはかの絃樂の如く絶えんとして続き、続きつつ縹緲としてまた絶えんとする一流れのリズムの起き伏しにある。

ことさらに行を別けず其まま書き下したのもその故である。兎角、日本のものはかういふ風にしぜんに書き下すのがほんたうのやうである。

わたくしはまた、この頃流行の自由詩の殆ど多くを眞の詩とも自由詩とも思つてゐない。どう考へても行を別けただけの散文で、すぐれた或る種の文章よりもつと弛緩したりリズムの、而も粗雑な思想の概念をただ放恣に非音楽的に述べたに過ぎぬと思つてゐる。

詩は詩である。詩に重んず可きはその高い精神である、韻律である、香気である、氣韻である。

大正十一年六月

小田原にて

白秋識

その
一

簡素な庭

古風の庭

大正十年秋、上州富岡某

氏別荘にて

紅葉を焚いて

同七年秋、名古屋月見坂

にて

山中消息

同七年冬、小田原伝肇寺

にて

ある人の庭

寂^{さび}しい庭だ、閑^{しづ}かな庭、古めかしい日本の庭、風雅な庭、それでも極^さりきつた、強^つひて取澄した庭、幽かな庭。

さびしいが陽^ひはあたたつてゐる。すべてが穏^なかな秋の半^{なか}ばの明^{あか}るさだ。輝^{かがや}きの無い輝^{かがや}き。物音の無い、人の気^けも無い庭、森閑とした庭、幽かな庭。

誰がこさへたものか、とにかく昔風の茶人好みの庭、何の自然も無いのに、形は心を写してゐる。こさへた人もさみしかつたか、心がそのまま現れてる。それが古びていつのまか、おのづと自然な眺めに寂びた。俳画の庭、幽かな庭。

日は午すこし過ぎ、空は高いが、何処からとなく、薄らした雲の層が、白くよどむで来ては掻き消えてゆく。築山の羅漢柏、枝ぶりの蜷つた松、ばらばらの寒竹、苔蒸した岩、瓢箪形の池の飛石、汀の小亭、取りあつめて、そのまま一つの象になつてゐる。動きの無い庭、幽かな庭。

濁つた池の面は錆び果てて、何の色香も無い庭だが、隅この小さ^{ちひ}な石橋の蔭には、破れ残つた蓮の浮葉が二つか三つ、下のあはれなすがれ葉には、時おくれの精霊蜻蛉が休んでゐる。その蜻蛉の透きとほつた赤い翅だけが、光つてゐるといへば光つてゐる、たつたそれだけのことだ。そよとの風も無い庭、しづまり返つた庭、幽かな庭。

あまりにかけ離れた、世間の外の気疎い庭。時には池水の深い底から、しんしんと何かが溢れて来て、ともすると冴えた輪波を拡がらせるが、それもまた何の手応へも無く、心に還つて了ふ。と、蜻蛉もついと立つて、またあちらこちらと、留り留り、それも、

あるかなしにそこらを揺り醒まして、何処かしらへみなくなる。
それつきり、ほんの一寸との果敢ない動き。声も無い庭、幽かな
庭。

それでも陽はあたつてゐる。すべての影が池の面にある。ひとつ
ひとつに光りもせねば、そよぎもせず、影は影とわかれ、濃淡を
つけ、同じところにやはり同じ姿を落したままで、それでそのま
ま日の暮の朧ろのかげりを待つばかりだ。どうにもならないさび
しい庭、深い気配の庭、幽かな庭。

鶺鴒が来た。おや、ひんこつひんこつとやつてゐる。やや寒うな

りかけた小亭ちんの、反そりかへつた小屋根の端はしで、いくら振つても振つても、黄色い尻尾は、いよいよ切ない刻みを早めるばかりだ。何時まで経つてもをさまり返つた庭、さみしい庭、さびしいさびしい幽かな庭。

紅葉を焚いて

紅葉もみぢして来た。庭の楓が紅葉して来た。紅葉ばかりになつて了うた。障子を開けて、つくづくと眺めてゐると、かうまで楓の多い庭だつたかと、今更に驚かされる。わたし私も妻も二人とも、その楓の

中の一つ家^やに、今まで居たかと驚かれる。今朝はまた殊更に、紅葉の光沢^{つや}がよう冴えて、小松の傍^{そば}の楓など、明るいほどに紅く透^{あか}いてる。まだ黄色^{きいろ}い下葉^{したば}や裏葉^{うらば}、あれも程なく枯れるであらう。ああ、秋もふけたと見てゐるうちに、もう褪せかけて、風もないのにはらはらと散る紅葉もある。それも寂しい私達には恰度程よい寂しさだ。簡素な紅葉、静かな紅葉、その紅葉の下枝には、雀も二羽来て啼いてゐる。寒い朝ゆゑ、それは冷めたい囀りだ。二羽でも雀も寂しからう、紅葉ばかりで、と思うとまた、私達の寂しい旅の姿がかへり見らるる。紅葉して来た。庭の楓も紅葉して来た。紅葉ばかりになつて了うた。

紅葉して来た。庭の楓が紅葉して来た。紅葉ばかりになつて了うた。寒くなつたと私が云へば、妻も左様で御座います、寒い朝でと袖を合せる。旅の事ゆゑ、なほさら寒さも染^しみるであろ。さうはいふものの、たとへ^は二十日でも住み馴^かれて見ると、この離^{はな}家が何とはなしに古びて来て、矢つ張り二人の住居^{ふたりすまゐ}らしい。二人もどうやら落ちついて来た。紅葉でも焚いて見ようかと、私が云へば、妻も素直に、焚いて見ませう、寂しいからと庭に下り立つ。竹の箒で私が掃けば、蹲^{かが}んで妻が拾ひ集める。かさこそと、落葉と落葉が擦れ合うて、それを二人で集めてゐれば、今はもう秋も限りと思はれる。遠州風の濡れ石の上、枯れた芝生の凹みなどに、落葉は一^{ひと}入^{しほ}哀れ深うて、土^{つち}の湿^{しめ}りもにじみ過ぎてゐる。紅葉して来

た。庭の楓も紅葉して来た。紅葉ばかりになつて了うた。

煙が立つ。煙が立つ。庭の楓の紅葉の蔭から、煙が立つ。紅葉を焚いて、ふすふすと白うくすぼる煙のかげで、^{あつた}温かいぞと私が^{かが}蹲めば、妻も^{もうて}双手をかざして蹲む。青い^{からたち}枳殻の小枝などまた折りくべて、長い^{かぜ}感冒であつたと私が云へば、私もどうやら^{かざけ}感冒気だと、妻もわびしい。大切におし、旅で病んでは心細い、私も今度は頼りなかつたと、私も紅葉をまた火にくべる。ほんとにね、それでも早う^{なほ}お癒りになつてよかつたと、妻もまた紅葉をくべる。それもみなお前のお蔭だ、よく来て呉れた、難有かつたと、しみじみ、私は煙に^む噎せる。いいえと妻も、向うへ立つて、紅い紅葉

を拾うて来る。早う帰らう、お前がまた病氣にならぬうちにと云へば、ほんとに早く帰りませう、何と云つても自分の家がいちばんいい、旅は寂しい、心細い。殊にここらは霜が深うて、もう雪にでもなりさうなと、一きは赤く火を吹き立てる。煙が立つ。煙が立つ。紅い楓の葉蔭から煙が立つた。

紅葉して来た。庭の楓が紅葉して来た。紅葉ばかりになつて了うた。旅に来て長らく病んだが、心細いものだ。俳諧の聖芭蕉でさへも、旅に病んでは寂しかったか、夢は枯野をかけ廻ると、云うたではないか。お互ひに大切に^{だいじ}する事だ、愛^{いとほし}惜い物は命だと、私が云へば、妻も寂しく笑つて噎せた。いい煙だ、寂しいいい紅

葉だ、せめてもう少し温まつてと、紅葉を焚いて、枝の紅葉ももう末かと仰いで見れば、はらはらとまた滾こぼれてくる。もういい、もういい、いい程に焚いて朝飯にしませう。煙が立つ。煙が立つ。紅い楓の葉蔭から煙が立つた。

山中消息

寂しいものは山の住居だと人もいふ。人里を少しでも離れると、けつく気楽なと思はぬでもないが、さりとて、人に逢はねばやっぱし寂しいものだ。たまさか通りがかりの人声の、小荷駄馬でも

曳き、蓆でも着て、裏の岨路を、えつちやほう、はいしとうとうと叱りながらに上り^{のぼ}下り^おする、耳につき、つい目につくのも心丈夫な思ひがする。いよいよ死にました、小さい^{ちひ}赤んぼでございましてと、小さい棺^{ひつぎ}をかついで来てさへなほさらだ。生きとし生ける鶇^{ひよ}や百舌^{つぐみ}、鶇のたぐひ、木々の枯葉に驚く声も、けけつちやう、ちやうちやう、きいきいきいと親まる。

空は晴れても、冬は日あしが短うて、いつとなく黄ばみかけると、早くも夕焼方の風向^{かざむき}となる。縁に出て、ぽつねんと眺めてゐると、何ともないやうでゐて心ぼそさが身に染みる。傾いた萱屋根の山門も、向うに見えて、其処から続いた一筋道の、此方はさら

に奥ぶかくて、雀のお宿とでも云ひさうな、これが私の住居かと思へば、堪へられぬ。朽ちはてた外そとばしら柱には、日あたりがよくてか、霸王樹サボテンや竜舌蘭など匍ひ絡んではあるものの、掛け忘れた数珠の緒の二くさり三くさり、もうぼろぼろに腐れかけてる。これが仏のゐられる寺だ。

寒々さむさむと揺れてゐるものは、孟宗のほづえ、ささ栗のそばかやの櫃かやの木、枯枝の桐の荅かう、墓原の香かうのけむり。井戸端の紅い山茶花は散りつくして、昨日きのふ咲いた庭の白薔薇だけが新らしかつたが、今朝けさ人が来て切つて了つた。ところどころに白い萱の穂もそよげば、一羽の白い鶏でさへ、吹かれどほしで消えもやらぬ。それは寂し

い揺れ方だ。

遠々^{とほどほ}に消えてゆくものは雀のかけ、冬陽^{ふゆび}の名残、時雨も幽かに
わたつてゆくが、ともすると、いつのまにやら雪になつてゐる。函
根あたりは猶さらだ、白い白い雪の野山だ。

簡素だと思へば簡素、寂しいと云へば寂しい。一人でゐてもゐら
れるものの、なまじ、二人で慰め顔に、エネチアまがひの古い洋^ラ
燈^{ンテ}など点^{とほ}して見るので悲しくなる。

人は人、どうせ私は私だと思つて見ても、その人ごとが忘れられ

ぬので、便りも待つ、いぢらしくもなれば腹も立つ。郵便くばりにも番茶の一つもほうじて出す。それかと云うて、その日その日の新聞紙でさへ、日が暮れてからやつと着くのでよくは読めず。
 夜はひとしほ波の音までが聞えるゆゑ、明日の日和なぞ気にかかつて、月の光が白い障子に射すまでは、雨戸も閉めねば、寝ねもせず。

夜が夜中、厠に立てば、裏の山には月が澄んで、畑の葱さへ一つ一つに真青だ。まつさを虫ももう鳴かぬが、それだけ凄^{しはぶ}い。首を竦めて、咳く時の寒さと云へばまた格別だ。せめて風邪でもひかぬやうにと、頸巻なぞして、手水つかへば水も凍つた。

かうした私のこの頃です。

その
二

秋山の歌

黎明の不尽外二篇

大正十年秋、妻菊子
とともに御殿場を経て伊
豆吉奈温泉に行く、そ
の時の詩。

遠山脈の歌

大正十年秋、上州富
岡にて。

黎明の不尽

天地あめつちの闢ひらけしはじめ、成り成れる不尽ふじの高嶺たかねは、白妙くすの奇しき
 高嶺、駿河甲斐ふたくに二国かけて、八面やおもてに裾張りひろげ、裾広に根
 ざし固めて、常久に雪かつぐ峰、かくそそり聳やきぬれば、厳いかし
 くも正しき容かたち、譬たとふるに物なき姿、いにしへもかくや神さび、神
 ながら今に古りけむ。たまたまに我や旅行き、行きなづみ振りさ
 け見れば、妻と来てつつしみ仰げば、あなかしこ照る日もわかず、
 暮れゆけば雲巻き蔽ひ、霹はたた靨がみはためくさへに、稲光さ青の火柱、

火ばしらの飛ぶ火のただち、また、とどろ電ぞ飛びたる。御殿場
 のここの駅路うまやぢ、一夜寝て午夜ごやふけぬれば、まだ深き戸外とのもの闇に、
 早や目ざめ獵犬かりいぬが群、勢きはひ起き鎖曳きわき、跳り立ち啼をどき立ち
 急せくに、朝獵の公達か、あな、ひとしきり飛び連れ下りる騒さうぞき
 の、さて出立でたつらむ。けたたましく自動車の鳴り爆はぜる音、咽喉のど
 太ぶとの唸り笛さへ、凝こり霜の夜凝よごりに冴えて、はた、ましぐらに何
 処づくへか駈け去り去りぬ。底冷えの戸の隙間風、さるにても明け近
 からし。目のさめて明告鳥あけつげどりの息長に啼き呼ばふ声、そこたなく
 応こたふる声の、裾野原揺りどよますに、おのづ覚め我は在りけり、
 目はさめて我もありけり。つくづくと首延のし見れば、こちごちの
 濃霧こぎりのなびき、溪の森、端山の小襷こひだ、黒ぐろとまだ氣けぶかきに、

びようびようと猛ける遠吠、をりからの 暁あかつきやみ 闇を続け射つ速はやだ

弾まの音。たださへも益良夫ごころ溢れ揺り抑へもあへぬを、見

透かせば渦巻く霧の瑠璃雲の漂ひが上、数かぎりなき糠星の瓔珞

の中、うちあなあはれ不尽の高嶺ぞ、今し今、一きは清き紫の朝よそ

ほひに出で立ち立てれ。夢か、こは、まことなりけり。夢ならず、

現うつなりけり。起きよ起きよ。まことこれ日の本の不尽、木花咲耶

姫の神、神しづまりに鎮まらす不尽の御嶽みたけぞ、見よ目に見えて近

ぢかと明け初むるなれ。起きよとて妻揺りたたき、目ざめよとま

た呼び覚まし、口漱ぎ、さて、身をきよめ、さむぎむと袂合あはし、

しみじみと二人い寄り、ひたすらにかくて見恍ほれぬ。時ありぬ。

やや時経れば、ほのぼのとして薄明うすあかる山際やまぎはのいろ、黎明しのめの

薄樺いろに焼け^{あか}明るその静けさに、日出づる前か、明鴉かをか
と二羽連れだちて羽風切る、その羽裏いよよ染みたり。はたはた
と山鳩もまた二羽競ひ行く。観る人も妻とし見れば、飛ぶ鳥も連
るものかも、うれしやと妻は見て云ふ、我もまた微笑みて見つ。
さるからに、薄紅き蓮華の不尽の隈ぐまの澄み明りゆく立姿^{いたゞき}、頂
の辺^へは更にも紅く、^{あか}つや紅く光り出でたれ。よく見ればその空高
く、かすかにも靡くものあり。高うして吹雪すらしか、かすかに
も雪煙り立ち、その煙絶えずなびけり。いよいよに紅く紅く、ひ
ようひようと立ちのぼる雪の焰^{あまぢ}の天路さしいよよ尽きせね、消え
てつづき、消えてつづけり。あなあはれ、かのいつくしき、この
かうかうしさ。眺むれど見れども飽かず、言^{こと}にさへ筆にさへ出ね。

あなかしこ、不尽の高嶺は日の本の鎮めの高嶺、神ながら奇しき
 高嶺、この高嶺まれに仰ぎてこの朝新あしたたにぞ見て、この我や、ただ
 この妻と、ただ得も云へず涙しながる。

遠山脈の歌

上つ毛の加牟良かむらの北に天あまそそる妙義荒船、遥はろばろと眺めに出れば、
 この日暮ふりさけ見れば、いや遠し遠き山脈やまなみ、いや高し高き山
 脈、いやが上へに空に続き、いや寒く褰ひだを重ねて、幾重ね、幾たなは重なは
 り、末遂に雲居にぞ入る。かりそめの旅にはあれど、夕されば内

にも堪へず、外^とに出でてひとり在りけり。向ひ吹く川の瀬の風、
 川風の吹きの凍え^{こご}に、我が向ひ迫る高崖、遙か見る北^{きた}の山脈^{やまなみ}。
 冬も早や絹のつや雲、卷雲の卷きのなびきに、氷凝^{ひこ}り雲層^{かさぐも}雲の
 群、重ね雲、寂び金の雲、下明^{あか}り雲ともわかず、薄ぎらひ山とも
 わかず、たださへも現^{うつ}ならぬを、たださへも果てしわかぬを、日
 の射すか末広の虹、幾すぢか透きて落せり。かうがうしその薄光、
 寂び寂びしプラチナのすぢ、濃き淡き峰の暈みに、引きちがふ山
 の小壁に、また雨と和^{なご}み注^{やまなみ}げり、柔かき金色の霧。あな遠し遠き
 山脈^{やまなみ}、あな高し高き山脈^{やまなみ}、立ちとまり見れども消えず、目ふ
 たぎて傷めど尽きず、目翳^{まか}げして遙けみ見れば、いや寂し薄き陽^ひ
 の虹、また見ればさらに彼方に、いや高き連^{つちやま}山の雪、いや遠き

連山の雪、ひえびえと、つぎつぎと、続きつづきて輝かがやきいでぬ。

湯どころの秋

ねもごろの日のあたりかも。そことなき湯のけぶりかも。日のあたる原のかたへに櫓立ち、櫓の傍そばに斑まだらうし牛ひとり居りけり。安らかに繋がれてけり。山峡の湯どころの秋、出て見れば下の小橋を、杖つきて渡る子もあり。垂稻の黄ばむ田づらは、をりふしに雀むれ立ち、道ぞひの茅屋の庭に、白菊の盛り見せたる、胡麻と栗並べ干したる、暇ある心に見れば、なかなか今日は安けし。

向つべに日のかげる山、なほ明く温かき山、その空の白き綿雲、
ちろちろと禽渡るさへ、なかなかにあはれとも見れ。妻と来て二
人来て、七日まり住み馴れてのち、やうやうに紅葉色づく遠近
の、この眺めなる。あなあはれ、ねもごろの日のあたりかも、そ
ことなき湯のけぶりかも。日のあたる原のかたへに櫟立ち、櫟の
かげに斑牛ひとり居りけり。繋がれてただねんねんと草食みにけ
り。

秋山の歌

秋山のなぞへの薄^{すすぎ}、ひとつらね揺りかがやけり。秋山の名も無き

山の、草山の、山の端薄、その穂の薄、揺りかがやけり。この夕、

出でて見て、向ひ見て、丸木橋妻とわたりて、また見れば、まだ

かがやけり。その薄刈る人もあり、また負ひて降^おり来る^くもあり。

下^{くだ}り来て、行きすぎざまに、さわさわと背^{そびら}見せゆく、さわさわの

背の薄、またかがやけり。雲白くうかべる峽の^{ひたむろ}日屯の^{そらあひ}空間の

中^{うち}、こまごまと飛べる羽虫も、よく見れば一つ一つに、命あり、

舞ひ立ち光る。閑^{しづ}かなり、ただ安らなり。まだ深き日のあたりな

る。暑からず、寒くしもなく、まだ温^{ぬく}き日のかげりなる。湯どこ

ろのうしろの山の、秋山の、その柔かき草山の、このもかのもに

さわさわと音する薄、穂薄の、今日来て見れば、揺りかがやけり。

あなあはれ、我も見て、妻も出て、二人ながむるさわさわ薄、そのさわさわ薄。

孟宗と月

凡て、大正十年秋の木兎の家の生活より

竹と曼珠沙華

わが門^{かど}の竹の林に、曼珠沙華赤く咲きたり。竹の根の一つ一つに、この華^{はな}や六つ七つづつ、日に増しに数かさみゆく。怪しくも赤き卷髭、髭細の蓮華^{はな}なす華、咲き盛るその華見れば、おのづから秋も澄みけり。いよいよに風も寂びけり。隣り寺、寺の古墓、日あたりは未^まだも暑けど、墓掃くとかがむ影すら、闕伽^{あか}汲むと寄るすらも無し。あなあはれ、摩訶曼珠沙華、出で入るとひとり眺めて、時をりは妻と眺めて、昨日^{きのふ}よりいよよ殖^ふえしと、まだ今日も赤し

とぞ見る。孟宗のしだれ笹ゆゑ、陽^ひは射せどいぶせき藪を、常く
ぐり我は在りけり。わびしけど遊び馴れけり。山住の心安さは、
藪越しに浪の音聴き、里囃子うれしとも聴け、施餓鬼過ぎ流石さ
びしく、人訪はぬ今は堪へえね、また出でて竹の根見れば、曼珠
沙華赤く赤きに、ちらと向き、釣眼^{つりめ}野狐、うしろ向き尖り口して、
小藪吹き、吹き吹く風に、日の暮に、あな、飛び飛びて消えつつ
失せぬ。

竹の林の歌

わが宿の竹の林に、夕あかりかがよふ見れば、その竹の湿る根しめごと
 とに、何か散り、深く光れり。その節のひとつひとつに、何かま
 た留とまり光れり。その笹のさみどりの葉に、何かまた揺れて光れり。
 金こんじき色のその光るもの、こまごまと眼に染しみるもの、雨ふりてあ
 かれるのちは、とりわけて揺れてうつくし。寂しくて見てゐるき
 はは、いよいよに消えてうつくし。揺るるとただ見て居をらむ、
 消ゆるともまた見て居らむ、堪へ堪へて日の暮るるまで、なほな
 ほに寂しがりつつ。わがやどの竹の林の夕あかり、裏山松の松風
 の音のこなたに。

蝸の歌

蝸かなかなの啼き連るるなり、二つなり、啼き連るるなり。その二つ啼き
 やめばまた、こなたより啼きしきるなり、ただ一つ啼きしきるな
 り。孟宗の片日射なり、山松の遠日射なり。かなたには輝りきら
 ふ海、こなたにはわたる山霧、山ぎりに山の施餓鬼のほとほとに
 果つる頃なり。金色こんじきに秋の日射の斜なし澄みとほる中、蝸かなかなは啼
 きしきるなり、急せき急せきて啼き刻むなり、二つ啼き、一つ啼き、
 また、こもごもに啼き速はやむなり。

俳句

蝸が二つ啼きまた一つがこもごもに

岡の鉾杉

わが宿の岡のなぞへに、杉いくつ屯たむろせりけり、せうせうと屯たむろせり
けり。鉾杉のひとむら木立、鉾杉の鉾を並べて、この朝明あさけしぐる
る見れば、霧ふかく時雨ほる見れば、うち霧らひ、霧立つ空に、
いや黒くその秀ほうかび、いや重く下べ鎮しづもり、いや古く並び鎮しづも
る、凡なべてこれ墨の絵の杉、見るからに寒し厳いっかし、かうがうし寂さび

し崇高^{けだか}し。あなあはれ岡の鉾杉、をちこちの小竹^{ささ}のむら笹、柿も
 みぢ、梅が枝^えの蔦、とりどりに色に出づれど、神無月すゑの時雨
 に濡れ濡れて、その葉枯れず、落葉せず、透かず、薄れず、ただ
 上^{うは}べわづか赭^{あか}みて天鷲^{びろうど}絨の焦茶いろすれ、深^{ふか}ぶかと黒くか青く、
 常久に古び鎮^{しづ}もる。寂しくも寂しき姿、堪へ堪へて常立つ心。あ
 なあはれ冬の鉾杉、海ちかき岡の鉾杉、鉾杉の渦^{うづな}成す霧に、涯^{はて}知
 れぬ海も見わかず、ひさかたの空もえわかね、時をりは、渡りの
 鳥のはぐれ鳥^{どり}ちりちりと落ち、羽^{はね}重^{おも}の一羽鴉も飛びなづみ、や
 やに来て揺る。あなあはれ雨の鉾杉、見てあれば幽かに揺れて、
 ふる雨に幽かに揺れて、ただせうせうと音たてにけり。

榧と栗

伝肇寺、小さき古寺、この寺の山の墓場に榧と栗並び立ちたり。並びたちともに老いたり。榧の木は栗の木のそば、栗の木は榧のかたへに、さびさびてすでに老いたり。その榧よりよりか
老い、この栗よりよりか立つ。榧と栗さびにさびつれ、なほし
未だ花は咲きけり、年ごとに花はつけけり。榧の木はかすかなる
花、栗の木は露はなる花、その榧に小さき榧の実、この栗に栗の
青毬、風吹けば実さへ毬さへ、またいつかこぼれこぼれぬ、枯
れ枯れて土にかへりぬ。見る人も知る人もなし。寺まうで墓まう

でびと、たまさかに蹲かがみ通れど、誰ひとり振り仰がず、誰ひとり眼にもとめねば、ただ二木ふたき立てるのみなる、榧と栗さびるのみなる。あなあはれ、榧と栗の木、落葉する栗も寒けど、常青く立てる榧の木、冬の日はことに高しよ。栗の木はいよよ透けれど、榧の木はいよよか黒く、薄日射函根いりひの入陽秀うに受けてひとり尖れり、いや黒くひとり堪へたり。雨まじり霰ふる日も、風まじり雪の飛ぶ夜も、こごしくも凍こごえ立ちたり。親しくも立ちて堪へたり。あなあはれ老木おいきの二木ふたき、親しくも並ぶ姿の、寂しくも隣り合ふ木の、頼り無き二木を見れば涙しながる。

孟宗と月

さわさわと揺るるものあり。午夜ごやふけて揺るるものあり。わが窓
 の硝子戸の外そと、真透ますかせば月に影して凍え雲絶えず走れり。円か
 なる望月ながら、生なま蒼く隈くまする月の、傾けばいよよ薄きを、あ
 な寒や揺るる竹あり。孟宗の重きしだれの重かさなりのその上へに抜け
 て、ただひとり揺るる秀ほのあり。目か醒めし、夜風が出でし、さ
 わさわと揺れて遊べり。しだれつつ前にうしろに、照りかげり揺
 れて遊べり。円かなる望月ながら、生なま蒼く隈あをする月の飛び雲の
 叢むら雲が間あひ、ふと洩れて時をり急に明るかと思ふ時なり。目に見
 えてさわさわさわと、照り浮ぶ孟宗の、あな、一きは強きつき狐ねび

光^{かり}のその月に、さながら生きて踊るかに、近^{ちか}明^{あか}りして、勢^{きほ}ひ
 舞ふ、かと思ればまた、何か暗く薄かげりして、揺らぎ止み、揺^ゆ
 らぎ騒^{さやだ}立つ。この夜^よさや、夜鳥も啼かず、藪かげの隣^{となり}の寺もしん
 しんと雨戸鎖^さしたれ。時として川瀬の音の浪の音と響き添ふのみ。
 それもただ遠し、気疎し。あなあはれ、この夜の山に、何しらず
 目のさめしもの、我のみか、揺れそよぐあり。揺れそよぎ、独り
 遊ぶと、揺れそよぎこの目の外^{そと}に、またさわさわと音立ててゐる。

荒浪千鳥の歌

磯^{しな}長の小^こゆるぎの浜、この浜や荒浪高し。この夜ごろいよいよ高し。時^し化^けつづき西風強く、夜は絶えて漁火^{いざり}すら見ね、をりをりに雨さへ走り、稲妻^さの青^さの映^{うつ}りに、鍵形^さの火の枝^うの棘^{はり}ひりひりと鋭き光なす。そのただちとどろく巻波。時として雹さへ飛ぶに、なにぞ何^なぞ乱るる鳥は、なにぞ何^なぞ散り散る鳥は。目に見れば数かぎりなく、声きけば消^けなば消^けぬかに、へうへうと連れ啼く鳥の、百千鳥、荒浪千鳥。荒浪の穂立^{ほだち}の空を、とまるすべ、寝^ぬるすべ知らに、ただ飛びて散り散る千鳥。この海や涯^{はて}し知られね、この荒れやはかり知られね、初夜過ぎて、また後夜かけて、闇ふかく翼^{はね}ふる千鳥、この雨を、また稲妻を、ひた濡れてかがやく千鳥。ある声は遠くはぐれて、ある群は斜め乱れて、また或るは陸^くの方向

き、また或るはちりちりと退^のき、すれすれに或るは落ちつつ波の上驚きて飛び、時に消え、時に明り、いよいよに暗く恐れて、いよいよに青に染^そまりて、時わかず連れ啼^なく千鳥、へうへうと凍^こゆる千鳥。いつまでか全^{また}く迷ふぞ、いつまでか飛びてやまぬぞ。磯^し長の小^{なが}ゆるぎの荒浪千鳥。荒浪の天うつ波の逆まきのとどろきが上、あああはれ、また、向き向きに、稲妻の青の脅^{さを}えに連れ連れ乱る、啼き連れ乱る。

冬の山そば

大正十年冬、小田原近郊の散策より

冬の山岨

玉くしげ函根の山は短か日のことに短かく、み冬さり霜下り来れば、午過ぎて日の目も知らず。向つべの山は明れど、こなたなる高山の岨、風寒く木の葉ちるのみ。早や早やも土は凝りて、岩角の犬羊齒が下、枯れ枯れの雑木の根ごと、そくそくと氷柱さがれり。ほきほきと氷柱搔き折り、かりかりと噛みもて行けば、あな冷た、つめたかりけり。妻もまた冷たよと云ふ。二人ゆく高崖の上、何の枝ぞ透きてこまかにつや黒の果をちらつかす、ふり仰ぎ

透かし見すれば、高く澄む空の青きにひえびえといそぐ雲あり、
 また薄く消ゆるものあり。長尾鳥飛びて叫ぶに、行きなづみ蹲み
 て瞰れば、あな寒むや溪裾紅葉、鉾杉の暗みを出でてひと明り紅
 く燃えたり、その紅葉淵に映れり。人知らぬ寂びと静けさ。その
 下に飛び飛びの岩、岩もまた幽けかりけり。冬はなほ幽けかりけ
 り。あなあはれ、櫟の枯木行き行けば見る眼に聳え、滝落ちてか
 げり陽迅し、あなあはれ、山の端薄陽。下見れば早や塔の沢、こ
 ちごちに湯の香煙りて、ちらちらと揺るる燈の見ゆ、海見えて漁
 火ざりつく見ゆ。この岨や馴れし山岨、遠く来し旅にもあらね、さは
 急ぐ道にもあらず。我がどちや言にこそ出ね、今さらの連れにも
 あらねば、ただ二人ほつりほつりと、日の暮はほつりほつりと、

また家路さし下るのみなり、降りるのみなり。

冬の日棚田

丘窪の冬の棚田はねもごろにうれしき棚田、寂び寂びて明るき棚田。たまさかに鶯茶の刈田、小豆いろ、温かきいろ、うち湿る珈琲の土。^{つち}下田^{しもだ}にはいくつ稲村^{プラチナ}白金^{なご}の笠めき和め、上畑は緑の縞目、わづかにも麦ぞ萌えたる。その畑に動く群^{むらどり}禽^けつくづくくと尾羽根振りては、また空へ飛び立ち翔^{かけ}る。あな冷^{つめ}た群の鵲鴿群れ飛べど目にもとまらず。いづこにか鶉は叫べど、風騒ぐけはひも聴

かず。ただ低き日あたりの中、茅屋根の物静かなる、紫に寂び沈
みたる、人気なき庭にはあれど背戸ごとに柿の実も見ゆ。裏丘へ
のぼる小径は孟宗の林に見えて、その藪の上の日向に蜜柑もぐ人
もよく見ゆ、声高になにか語りて燧石切る葭火も見ゆ。珍らかに
いとど澄めばか、遠近の枯葉のくぬぎ、草もみぢ、耀く薄、おし
なべてかくて安けし。あなあはれ、ここの丘窪、明るけど古さび
棚田、うれしけど冬の日棚田、その空に翔る群禽、鵲鴿の薄黄
の羽根のただ波うちて影もとまらず、影もとまらず。

落葉行

ひとりゆくこの山岨^{やまそ}は、落葉のみ溜^{しめ}り湿^ぬれり。落葉踏み踏みつ
つ行けば、いづく飛び鶉^{うは}高音うつ。かさこそり、櫟^{くぬぎ}の枯葉わがか
たへまた声立てぬ。日おもての草崖^{くさがけ}薄^{すすき}、その穂にも落葉かか
れり。草紅葉まだ温^ぬくけれど、その上^へにも落葉うごけり。向ひ山、
こなたの小丘、見るものはみな枯木のみ。空ぐるま軋^{うは}るを見れば、
上^{うは}岨^そを尻毛振る赤馬^{あか}、ひようひようと吹かれゆく馬子、みな寒
き冬のものなり。溪^{たに}の上の小茶屋の椅子も紅葉積み、その溪^{たに}かけ
て、はらはらと落葉ちりゆく。山窪^{やまくぼ}の幾むら藁^{わら}屋、水ぐるま廻^{まは}れ
る見れば、ほとほとに水も瘦^{うす}せたり。櫟^{くぬぎ}原^{はら}ただ目に寒く、雨
のごとちる落葉あり、よく見ればいよいよ繁し、声立てていよいよ

よ寂^{さび}し。ほうほうと立てる雑木の岨路^{そぼち}ゆき、別れ径^{みち}ゆき、当処^{あてど}さへ果てはわかねど、風のまま歩みのままに、行き行けばただ落葉なり、前うしろただ落葉なり、かさこそと、また、はらはらと、空にも地にも声ばかりして。

落葉吟

かうかうと照る月ながら、雨のごと飛ぶ落葉かな。ああ落葉、その影見れば、秋も早や老^{おい}いにたるらし。ああ落葉、その声きけば、おのづから冬か待たるる。身の老^{おい}といふにはあらね、おのれまた

若しともなし。さやけさはかかる夜ながら、見の惚れ^ほむ光にあら
 ず、杉木立青きはあれど、隣^{となりやま}山早やも痩せたり。枯れ枯れの
 木の枝^えを透きて、月はただ遠くあらはに、落葉また風に吹かれて、
 へうへうとかぎりも知らず。いつの日かまたと還らむ、いつの世
 か久しかりちふ。これやこの常なかる世に年月の移らふまにま、
 我はあり、我はあれども、いつ知らず後^{あと}べのみ見る。なほなほも
 先^{さき}ぞ気遠き。而かもなほ過ちにけり。つくづくと恥ぢ泣きにけり。
 さりとては諦^{あきらめ}も得ず、また和^{のど}の悟りをも見ね、ただすこしおのれ
 知るからだ堪^{へりくだ}へて遜るのみ。ややややかにかくてあるまで。寂し
 がり寂しがるなる。ほとほとに堪へは得ぬとも、この寂びや、身
 もて得し寂び、せめてものまだ頼りなる。ただたのみただ守るべ

き。ただひとり物も思はむ。さてひとり歩み歩まむ。あはれなる
末の末かも、飛びちらふ落葉なるべき。落葉なら風のまかせよ。
照る月に、北山風に、夜あらしに、影は影とし、はらはらと、た
だ、はらはらと声ばかりせよ。

俳句

おらもまたあなたまかせよ一茶坊

り

竹林の早春

大正十一年の早春、小田原木兎の家の生活よ

水仙と菊

窓掛の絹寒冷紗、硝子扉^どの外の短か日、短か日の斜^ひめの陽ざし。
窓掛の絹寒冷紗、その蔭の水仙と菊、鉢台の薄玻璃の壺。今朝咲
きし一重水仙、いつの日か挿^さしし寒菊。冷たくて白き水仙、やや
温^{ぬく}く黄なる寒菊。水仙の青^{さを}の葉は張り、寒菊の葉は半ば枯る。水
仙は水仙の影、寒菊は寒菊の影、その壺も玻璃の影して、栗^{くり}色^{いろ}
の砂壁に在り。硝子透き、窓掛を透き、斜^びめ陽^{あか}の明^{あか}るみぎりには、
冬もなほいつくしく見ゆ、頼^{たより}無き影としも無し、柔かく親しかり

けり。薄玻璃の影もゆらげり。妻とある二階の書齋、午過ぎはた
 だ閑しづかなり。湯沸のふき立つる湯気、わがふかす煙草のけむり、
 また揺れてその壁にあり。妻の影、わが影もあり。水仙と寒菊の
 花、現身にうつつに観れば、まこと今あはれなりけり。水仙と寒
 菊の影、現なく映うつらふ観れば、現なし、寂さびしかりけり。近ちかぢか々と
 啼き翔る鶉、遠とほどほ々とひびく浪の音。誰か世を常なしと云ふ、久
 しとも愛かなしとも思もへ。山に住み世に離さかるとも、全またく世を厭ふにあ
 らず、五月蠅うるさやと、切せちに思へど、人来ねばたづきも知らず、妻と
 我、二人居れども、かくてあれども、時をりはただ寂しくて、眼
 を見合せぬ。

聴けよ妻ふるもののあり

聴けよ、妻、ふるもののあり。かすかにもふるもののあり。初夜過ぎて夜の幽けさとやなりけらし。ふりいでにけり。何かしらふりいでにけり。声のして、ふりまさるなり。雨ならし。いな、雪ならし。雪なりし。雪ならば初の雪^{はつ}なる。よくふりぬ。さてもめづらにふる雪のよくこそはふれ、ふりいでにけれ。さらさらと、また音たてて、しづかなり、ただ深むなり。聴けよ、妻、そのふる雪の、満ち満ちて、ただこの闇に、舞ひ深むなり、ふりつもるなり。

俳句

たまさかに浪の音して夜よの雪なり

元旦の夜のこと

あな疎忽そこつ、吐息といきいでたり。気にかけて、何といふ事もあらぬを。
また妻よ、焙ほうじてむ玄米の茶を。来む春の話、水仙の話、やがて
生れむ子のことなども話してむ。元旦のこの夜よの深さ、山住の我

らなるゆゑ、いついつとかはりは無けど、今日はまたとりわけて、
 よろしかりけり。また全く今しづかなりけり。今さらに何をかや云ふ。
 この夜よさのこの安けさは神ぞただ守りますべき。心ゆくうれしさ
 の中、うち我はただ詩を思ふなる、みまし汝また差しのぞくなる。しづかな
 り、ただあはれなり。筆動く音のみぞする。身じろきの、息のみ
 ぞする。さてあらば夜も明けぬべし。あれ聴けよ、とり鶏啼くらしき。
 また聴けよ、浪の音なる。二人ただかくて起きゐて、まこと今た
 だ二人なる。二人なるいのちの息の、おのづから触れかよふかな。
 親しくもゆき通ふかな。蜜柑なと一つむきてむ。ちかぢか近々と火にむ
 かひゐむ。またすこし炭つぎ足して、さて待たむ、二日の朝の海
 原の紅あかき日の出を。

落の臺

新らしき落の臺かな。珍らしき^{にが}苦き^か香ぞする。その落の臺、一つ
刺し、二つ刺し、竹の小串に三つ刺して、さて味噌つけて、火に
焼きて、あな^{にが}苦さよと一つ食べ、あなうまさよと二つ食べ、あな
いづくしと三つ食べて、さてさびしやと我ゐたり。春さきの、あ
は雪の、消^けなば消^けぬかの、声聴きてけり、そのしばらくは。

竹林の早春

わが庵の竹の林に、こぬか雨今朝も湿^{しめ}れり。春さきのこぬか雨なり。ふるとしも見えぬ雨なり。こぬか雨笹にこもりて、香^{かう}炷^たけば香^{かう}もしめりて、事もなし、ただ明^{あか}るけし。こまごまと濡れかかるのみ、縹緲と煙曳くのみ。しづかなり、ただ安らなり。顔出して、つくづく居れば、笹子啼き、目白寄り来る、笹葉揺り揺りてまた去る。散りたまる去年^{こぞ}の枯葉も、寂しけど寒しともなみ、何かしら萌ゆる緑の、春は早や竹の根にあり。よき湿^{しめ}りかくて湿^{しめ}らば、竹煮草、葛、露の臺やややにすすろき出でむ。髭長の藪の菫、菫などやがて咲くべし。松風の声は沈めど、常ならぬさびしさな

らず。うらそ裏岨そばののぼりくだりに、ほつほつと通る馬さへ、時をり
 は青きつけつつ、声こはだ高かの人の話も、濡れながら行けば親しよ。
 静こころ香かうをつぎつつ、さて、今日もうら安くこそ。こぬか雨ふ
 るがごとくに、こまごまといつくしみてむ春さきの我の思を。

こころこころ蛙の歌

春さきのこころ蛙かはづ、一つ鳴き、二つ鳴き、こころこと後あと続け鳴
 き、ふと鳴き止み、くぐみ鳴き、また急に湧きかへり鳴く。いよ
 いよに声合せ鳴く。近き田のこころこころ蛙、よく聴けば声変り鳴く。

声変り、一つ一つに、あなをかし、鳴けるさま見ゆ。あちら向き
 こちら向き、飛び飛びて、また水くぐり、うちひそみ、頬をふく
 らかし、鳴き鳴ける咽喉のさま見ゆ。あなをかし、近田の蛙、さ
 みどりの根芹か湿る、塗畔^{ぬりあぜ}かまだ新らしき。雨もよひ雨よぶ声
 の、寒けども寒しともなし、寂しけどなにか笑へり。友よびてま
 た鳴く蛙、遠田にも遙かどよもす。あなあはれ、遠田の蛙、また
 聴けば、遠く隔てて、夜の闇の瀬の音隔てて、いや離^{さか}りうち霞み
 鳴く。また寄せて近まさり鳴く。遠つ浪辺^へに寄すること、遠つ風
 吹き寄すること、その声は夜空つたひて、いよいよに近く響きて、
 さて絶えて、また続け鳴く。近き田もまた競ひ湧く。初夜過ぎて
 また後夜ふけて、なほなほにどよもす声の、おそらくは夜の明く

るまで。萌黄月、月の円まろがさ暈、遠近の薄き飛び雲、濡れ濡れてちろめく星の、糠星のかげ白むまで。ころころと、またころころと、夜もすがら、夜をただ一夜、春さきのをさな蛙が、声かぎり、また声かぎり、ここたく鳴くも。

立枯並木の歌

大正五年、葛飾小岩の紫煙草舎の生活より。
但し、鳥の啼くこゑ外一篇は当時の作。
その他は十年春作。

立枯並木の歌

霜ふかき野川の堰みぜき、あはれよと今朝見けさに來れば、いつとなく水量みかさ
 涸れかつつ、隙間なく氷張りけり。枯すすき、土堤どての枯草、凍りこごつ
 き白くきびしく、両側もろがはの立枯並木、いよいよに白くきびしく、
 雪空の薄墨色にこまごまと梢こずゑあか明り、下空したぞらの小枝さえのほそ枝立
 ちつづき、見れども飽かず、入り交り網目して透く。両側もろがはの立
 枯並木、下見しもれば一側並木ひとはなみき、時をりにとまる鴉もその枝の霜に
 すばまり、渡り鳥ちらばる鳥もその空に薄うすけぶり煙立つ。風吹けば

かすかに揺れ、雪ふればいよよしづもり、さむぎむと時雨るる夜
 半も、月あかり落ちゆく暁あけも、消けなんとし消けたずかすかに、現うつに
 もうつしけなくも、ただ寂し薄し果敢なし。霜ふかき野川の堰あぜ、
 今朝もまた氷張りけり。その川の両もろ側がはつづき、隙間なく枯木つ
 づけり。あなあはれ立枯並木。

潮来の入江

すな真菰、真菰が中に菖蒲さく潮来いたこの入江、はるばると我が求とめ
 来れば、そのかみの潮来の出嶋荒れ果てて今は冬なる。旅やどり、

消ゆるばかりに、一夜寝て寝ぎめて見れば、霜しろし水の辺の柳、
何一つ音もこそせね、薄墨の空の霧らひにただ白く枝垂れ深めり。
枝垂れつつ水にとどけり。また白き葦にとどけり。そのかげの小
さき苦舟、いよいよに霜の凍りて、こまごまと霜の凍りて、舟
縁も苦も真白く、櫓も梶も絶えて真白し。つくづくと眺めてあ
れば、閑かなる入江のさまや、苦舟にのぼる煙も、風無けば直ぐ
に一すぢ、ほそぼそとしばしのぼれり。広重のその絵の煙、目に
見れば浮世なりけり。あなあはれ水の辺の柳、あなあはれかかり
の小舟、寂しとも寂しとも見れ。折からや苦をはね出て、舟縁
の霜にそびえて、この朝の紅き鶏冠の雄の鶏が、早やかうかうと
啼き出けるかも。

夜の雪

この夜^よさも雪はふりけり。かの夜^よさも雪はふりけり。その声や靈^{たま}
も消^けぬかに、降り積り、消^けぬる白雪。白雪のふれば幽かに、たま
ゆらは澄みてありけど、白雪の消^けぬるたまゆら、ほのかなるまた
も消^けにけり。白雪のはかな心^{こころ}地の、我身にも遣^やるかたもなし。

鳥の啼くころゑ

かおかおと啼くは鴉、びよびよと啼くは雛ひなどり鶏、雀子はちゅちゅ
 とさへづり、子を思ふ焼野の雉子きぎす、けんけんと夜よも高音たかねうつ。現う
つしみ身の鳥の啼く音ねの、なぞもかく物あはれなる。天あめわたる秋の雁か
りがね金、春くれば遠き雲井にかりかりと消えて跡なし。

米の白玉

大正五年葛飾小岩の生活より、
十年春作。

アツシジの聖の歌

アツシジの聖^{ひじり}フランチエスコの物語。フランチエスコは雀子を愛^をしみ給ひき。雀子も慕ひまつりき。現身^{うつしみ}の人にてませば、かの人も亦^{また}、人のごと寂しくましき。寂しくて貧しくましき。寂しくて貧しきが故^{へりくだ}、遜^{へりくだ}り、常に悲しくましき。いといと悲しくましましき。それ故に、末^{すゑ}遂^{すゑ}に神を知らしき。その聖道のべに立たしめたまへば、雀子は御後^{みあと}べ慕ひ、御手^{みて}にのり、肩にとまりき。さてちゆんちゆんと鳴いたりき。あなあはれ、雀子よとて雀子を

撫でさすり、搔い撫でさすり、偽りなせそ、むさぼりそよ、おの
 づからなれ、正しく、直く、なほ常童とこわらべにて、天地あめつちの神ごころに
 も通へとぞ、悲しかれよと宣のりましき。御法説みのりかしき。雀子を愛を
 しみたまへば、雀子も慕ひまつりき。雀子にも解ときやすき御言葉
 なれば、雀子も御言葉ををろがみまつり、羽根をすり頭つむり上げてき。
 またちゆんちゆんと鳴いたりき。さて徒いたづらに物を欲り、浮かれ、た
 ばかり、盗まざりけり。偽らず、安らなりけり。かかる時、草原
 に露満ちて、虫鳴きそそり、飾り無き野の花のかをりも吹く風の
 涼しきままに、空は円く澄みわたりて、また、塵ひとつだにとど
 めざりければ、聖の御頭みつむりかすかに後光をはなち、差しのべたま
 へる両ふたつの御手みての十の御指は皆輝きて、その掌たなひらの雀子さへも光る

ばかりに喜び羽うち、御前^{みまへ}に輪を成す雀のむれもみなみな雀の後光をかすかに立ててぞ啼き恍^ほれ遊ぶ。フランチエスコは御空を仰ぎて、主よ、主の奴僕^{しもべ}はかくありぬ、かく貧しきが故にこそ世のあらゆるもろもろの御宝をも却つて主のごとく、この身ひとつに保ちまつる、ありがたやハレルヤとぞ、涙ながして讃^ほめ禱^のりませば、雀とともに、ハレルヤ、ハレルヤと、眼を上げ涙ながして御空を仰ぐ。現身^{うつしみ}の人の聖^{ひじり}と現身^{うつしみ}の鳥の雀と、雀とフランチエスコと、朝夕に常かくなりき。あなあはれ、世の常^{つね}の事にはあらずよ。温かき御心ゆゑぞ、大きな博^{ひろ}き御心もてぞ、ありとある愛^をしみたまへば、御心は神にもいたり、雀にも通ひましけむ。あなあはれ、人のこの世の現^{うつつ}にも、かかる聖^{ひじり}のましまししものか。

米の白玉

一

ましら玉、しら玉あはれ。白玉の米、玉の米、米の玉あはれ。そ
を一粒、また二粒、三粒、四粒と数ふれば白玉あはれ。うすき瀬
戸白の小皿に、幾すくひすくへどあはれ、かそかそと声ばかりし
て、ころころと音ばかりして、掻き寄せて十粒に足らず、ひろへ
れど十粒を出でず、かそかそところろと、声するは、空しき櫃
の、空櫃むなびつの米櫃の底。ましら玉、しら玉あはれ。白玉の米、玉

の米、米の玉あはれ。

二

ましら玉、しら玉あはれ。白玉の米、玉の米、米の玉あはれ。そ
を一粒、また二粒、三粒、四粒と数ふれば白玉あはれ。掻きよせ
て十粒に足らず、ひろへれど十粒を出でず。今は早や我は饑ゑな
むを、我妻もかつゑはてむを、ましら玉しら玉あはれ。さは云へ
ど米のしら玉、貧しとてすべな白玉、その玉を雀子も欲れ、ひも
じきは誰もひとつよ、雀子も来ては覗き、饑ゑて鳴き、鳴きては
遊び、遊びては求食^{あさ}り、求食^{あさ}るを、米の玉あはれ。雀来よ、雀来

よ来よ、いとせめて啄めよこの米、ひもじくばふふめこの米、汝
らが饑ゑずしあらば、うまからば、うれしくかはゆく鳴くならば、
白玉あはれ。わがどちはこの我は、わが妻とても、今さらに食さ
ずともよし、食さずともよし。ましら玉、しら玉あはれ。しら玉
の米、玉の米、米の玉あはれ。

三

ましら玉、しら玉あはれ。しら玉の米、玉の米、米の玉あはれ。
絶ち絶ちて幾日をか経し、饑ゑ饑ゑて幾夜をか経し、この我や生
きて貧しく、生きんすべせんすべだにもなきものを、米の玉、し

ら玉あはれ。はづかなるあるかなきかの金を得て、かきよせて、市のちまたに米買ふと破れしや囊を手になげ、これに米、すこし賜たべよと乞ひのめば、入れて賜びけり、さらさらと入れて賜びけり。うれしくて走り出づれば金賜べと人の驚く。忘れたり、ゆるされませと赤らみて、金置きてまた駈づけ出れば、うしろより米はとおらぶ。驚きて、また忘れたり、ゆるされと、此度こたびはしかと、しら玉の米の囊をひきかつぎかかへて戻る。米の玉、しら玉あはれ。現なるこれや現か、ゆめならず、現なりけり。その現、現なるこそうれしかりけれ。しら玉の、ましら玉の、ましら玉の、しら玉あはれ。しら玉の米、玉の米、米の玉あはれ。

犬と鴉

一

犬の子に白き飯^{いひざら}皿、子鴉に青き飯皿、朝夕に同じ飯盛り、おのがじじ食^をせよと呼^よべば、犬の子は己^しが飯惜しと、子鴉は己^しが飯惜しと、犬の子は子鴉が飯、子鴉は犬の子が飯、ひたぶるに奪ひ取らむと、ひたぶるに盗み食^をさむと、ただ啼きつ吼えつ噛みつす。己^しが飯はすでにあまるを。己^しが飯に足れりとはせで、なじかさは他^{ひと}の物欲^ほる、なじかさはよその物欲る。同じことかはゆきものを、

同じこと飯は盛れるを。犬の子よ、子鴉よ、あはれ。

二

あなあはれ、みぎりひだりに、子鴉と犬の子と寄る。此方向けば
 子鴉あはれ、其方向けば犬の子あはれ。一方の鳥よ獸よ。ひと
 しけくかはゆきものを、同じけくかなしきものを、いづれ別きい
 づれ隔てむ。かにかくに両手あげつつかく叩き、撫でてあやせ
 ば、羽根はたき尻尾ふりきる。ひもじきかさらば食せよと、一つ
 掌に牛の乳盛れば、子鴉はみぎりより来て、犬の子は左よりきて、
 嘴と口つつき合せて、啄き嘗め、啄き嘗めつす。また、そねみ、

惜み、にくまず。あなあはれ空飛ぶ鳥と、地^{つち}を匍ふ家の畜^{けもの}と、い
つのまにかくや馴^なれけむ、なじかさはかくも親しき。これやこの
人の我が掌^てに相睦^{むつ}み和^{なご}むを見れば、今さらに喜ぶ見れば、この我
や、みぎりひだりにとみかう見涙しながる。

童と母

大正二年―三年、
麻布の生活より。

麻布山

麻布山浅く霞みて、春はまだ寂し御寺に、母と我が詣でに来れば、
日あたりに子供つどひて、風をあげ独楽を廻せり。立ちとまり眺
めてあれば、思ほゆる我がかぶる髪。ほほゑみて母を仰げば、母
もまたほほと笑ませり。けだしくや我がかぶる髪、母もまた忍ば
すらむか。我が母は何も宣^のらさね、子の我^{われ}も何もきこえね、かか
る日のかかる春べに、うつつなく遊ぶ子供を見てあれば涙しな
る。

童と母

垂乳根たらちねの母の垂乳たりちに、おしすがり泣きし子ゆゑに、いまもなほ我
 を童わらべとおぼすらむ、ああ我が母は。天あまつ日の光もわすれ現身うつしみの
 色に溺れて、酒さかみづきたづきも知らず、酔ひ疲れ帰りし我を、酒
 のまばいただくがほど、悲しくもそこなはぬほど、酔うたらば早
 うやすめと、かき抱き枕あてがひ、衾ふすまかけ足をくるみて、裾おさ
 へかろくたたかす、裾おさへかろくたたかす、垂乳根の母を思へ
 ば泣かざらめやも。

その
三

ほのかなるもの

大正二年、麻布にて。

ほのかなるもの

ゆめはうつつにあらざりき。うつつはゆめよりなほいとし。まほろしよりも甲斐なきはなし。

幽かなるこそすべなけれ。美しきものみなもろし。尊きものはさらに云はず。

ひとのいのちはいとせめて、日の光こそすべなけれ。麗かなるこ

そなほ果敢な。星、月、そよかぜ、うすぐものゆくにまかする空なれども。

ふりそそぐものみなあはれなり。雨、雪、霰、雹に霏、それさへたちまち消えうせぬ。

土に置く霜、露のたま、靄、霧、霞、宵の稲づま、ほのかなれども水陽炎のそれさへ頼むに足るものなし。

煙こそあはれなれども、捉へられねばよしもなし。山家にゆけど、野にゆけども、水のながれを堰^せくすべもなや。

ちちろと歎く蓑虫も、蛍の尻もみな幽けし、なまじ寝鳥の寝もやらぬ春のこころの愁はしさよ。

色ならば、利休鼠か、水あさぎ、黄は薄くとも温かければ、卵い
ろとも人のいふ。

水藻、ヒヤシンスの根、海には薔薇いばらのり、風味あやしき蓴菜は濁
りに濁りし沼に咲く、なまじ清水に魚も住まず。

花と云へば、風鈴草、高山の虫取堇、蒜の花。一輪咲いたが一輪

草、二輪咲くのが二輪草、まことの花を知る人もなし。

葉は山椒の葉、アスパロガス。蔓は豌豆、藤かづら。芥子に恨みはなけれども、その葉ゆゑこそ香も青く、ひとに未練はなけれども、思ひ出のみに身はほそる。

あはれなるもの、木の梢。細やかなるもの、竹の枝、菅の根の根のその根のほそ毛、絹糸、うどんげ、人参の髯。

はろかなるもの、山の路。疲れていそぐは秋の鳥、とまるものなき空なればこそ、こがれあこがれわたるなれ。玻璃器のなかの目

高さへ、それと知りなば果敢なみやせん。

巢にあるものはその巢をはなれ、住家なきもの家をさがす。栗鼠りす
は野山に日を暮らし、巡礼しばしもとどまらず。殻を負ひたる蝸で
でむし牛はいつまで殻を負うてゆくらむ。

かへり見らるる船のみち、背後しりへの花火、すれちがひたる麝香連じゃかうれん
理りの草花の籠、ひとの襟あしみなほのかなれ。

笛の音の類、朝立ちの駅路うまやちの鈴、訪ふ人もなき隠れ家のべるの
釦のほのかに白き、小夜ふけてきくりんのたま。

影はなによりまた寂し。踊子のかげ、扇のかげ、動く兎の紫のかげ、花瓶のかげ、皿に転がる林檎のかげはセザンヌ翁をも泣かすらむ。

夏はりキュール、日曜の朝麦藁つけて吸ふがよし。熱き紅茶は春のくれ、雪のふる日はアイスクリーム、秋ふけて立つる日本茶、利休ならねどなほさら寂し。

味気なきは折ふしの移りかはり、祭ののち、時花歌はやりうたのすぐ廃れすたゆく。活動写真の酔漢よひどれの絹帽シルクハットに鳴くこほろぎ。

さらに冷たきもの、真珠、鏡、水銀のたま、二枚わかれし蛇の舌、
 華魁おいらんめの眸。

しみじみと身に染みるもの、油、香水、痒ゆきところに手のとど
 く人が梳櫛すきぐし。こぼれ落ちるものは頭垢ふけと涙。湧きいづるものは、
 泉、乳、虱、接吻くちづけのあとの噎おくび、紅き薔薇さうびの虫、白蟻。

誤ち易きは、人のみち、算盤そろばんの珠。迷ひ易きは、女衞ぜげんの口、恋
 のみち、謎なぞ、手品、本郷の西片町、ほればれと惚れてだまされた
 るかなし。

忘れがたきは薄なさけ。一に好色、二に酒の味、あぢ三にさんげの歌枕。わが思ふ人ありやなしやと問ふまでもなし都鳥、忘れな草の忘れられたるなほいとし。

浅くとも清きながれのかきつばた。偽れる、薄く澄ませる、また寂し。まことなきものげに寂し。まことあるものなほ寂し。しんじつ一人は堪へがたし。人と生れしなほ切なけれ。

思ひまはせばみな切な、貧しきもの、世に疎きもの、哀れなるもの、ひもじきもの、乏しく、寒く、物足りぬ、果敢なく、味気な

く、よりどころなく。

頼みなきもの、捉へがたく、表現^{あら}はしがたく、口にしがたく、聴きわきがたく、忘れ易く、常なく、かよわなるもの、詮ずれば仏ならねどこの世は寂し。

まんまろきもの、輪のごときもの、いつまでも相逢はず平行^{なら}びゆくもの、また廻^{めぐ}るもの、はじめなく終りなきもの、煙るもの、消^けなば消^けぬかに纏れゆくものみなあはれ。

芸は永く命みじかし、とは云ふものの、滅び易きはうき世のなら

ひ。うたも、しらべも、いろどりもゆめのまたゆめ。

うつつをゆめともおもはねど、うつつはゆめよりなほ果敢な、悲
しければぞなほ果敢な、幻よりもなほ果敢な。

青空文庫情報

底本：「白秋全集 8」岩波書店

1985（昭和60）年7月5日発行

底本の親本：「観相の秋」アルス

1922（大正11）年8月1日発行

初出：ある人の庭「表現 2巻1号」

1922（大正11）年1月1日

紅葉を焚いて「潮音 5巻1号」

1919（大正8）年1月1日

山中消息「詩篇 3編1輯」

1919（大正8）年1月1日

秋山の歌「大観 5巻2号」実業之日本社

1922（大正11）年2月1日

孟宗と月「大観 5巻2号」実業之日本社

1922（大正11）年2月1日

冬の山そば「大観 5巻2号」実業之日本社

1922（大正11）年2月1日

竹林の早春「大観 5巻2号」実業之日本社

1922（大正11）年2月1日

立枯並木の歌「大観 4巻7号」実業之日本社

1921（大正10）年7月1日

潮来の入江「大観 4巻7号」実業之日本社

1921（大正10）年7月1日

夜の雪「三田文学 8巻3号」

1917（大正6）年3月1日

鳥の啼くこゑ「三田文学 8巻3号」

1917（大正6）年3月1日

アツシジの聖の歌「大観 4巻7号」実業之日本社

1921（大正10）年7月1日

米の白玉「大観 4巻7号」実業之日本社

1921（大正10）年7月1日

犬と鴉「大観 4巻7号」実業之日本社

1921（大正10）年7月1日

童と母「潮音 3巻6号」

1917（大正6）年6月1日

ほのかなるもの「ARS 1巻2号」

1915（大正4）年5月1日

※「ある人の庭」の初出時の表題は「寂しい庭」です。

※「山中消息」の初出時の表題は「消息」です。

※「夜の雪」の初出時の表題は「夜ふる雪」です。

※「秋山の歌」「孟宗と月」「冬の山そば」「竹林の早春」の初

出時の表題はまとめて「観想の時——長歌体詩篇二十一——」です。

※小見出しよりもさらに下位の見出しには、注記しませんでした。

入力：岡村和彦

校正：フクポー

2017年8月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

観相の秋

北原白秋

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>